

四季別

やまだみのる俳句集



# 春の句



春禽の煌めき翔ちぬ汀石

ものの芽に素十のこころ通ひけり

物芽でて切つ先立てし水際かな

春風裡高虚子の碑に対しけり

福音の使ひのごとく初蝶来

卒業や無垢の涙をな忘れそ

ゴルゴダの丘の永き日思ひけり

我らには十七字あり囀れる

天狗杉武者震ひして雪落とす

彩窓のイエスに遅日果てんとす

ギヤルどちら美脚なげだす花筵

助手席の首ががくりと目借時

花筏今や早瀬にさしかかり

空耳と思ふ春雷二度聞かず

子ら駈けて広場の落花とどまらず

転舵して真向く外海風光る

春光の水掬ひけり洗面器

最澄の一碑立ちたる雪間かな

遠足のしんがりへ喝とびにけり

ゆくりなく雪の濁世や涅槃変

啓蟄やマンホールから電話工

春泥に立ち往生のダンプカー

田一枚げんげ浄土のまま打たず

まどろみのそのまま涅槃し給へり

露天湯へ矢印の立つ雪間かな

花の須磨名だたる松を枯らしけり

島バスのめぐる七浦風光る

胎教の楽を聞きつつ春眠し

コンテナの野積みの山や菜種梅雨

雨晴れてきたりと揚がる雲雀かな

存問に交はず汽笛や沖のどか

モナリザの微笑み春の愁ひあり

下萌に碑あり宮水発祥地

不夜城はナース詰所の春灯

学問の宮に掬む水温みけり

存問のごと啓蟄に対しけり

初恋の思ひ出花の母校訪ふ

春愁や窓際族の夕ごころ

古都巡る大路小路に山笑ふ

天地のはじめも斯くや黄沙降る



靴跡に起ち直りたる物芽あり

縦走の尾根の道ゆき風光る

うづくまり水子に祈る老遍路

啓蟄の大地漫画の描かれけり

囀りて天なる神を讃ふべし

旅の春惜しむ間もなく機上人

鈴なりの祈願の絵馬に梅固し

摩天楼ビル屹立す花堤

春愁のコーヒー冷めてしまひけり

花屑の虜となりて水漬く舟

楼門を凌ぐ老松鳥雲に

窓の日に背伸びしてをるシクラメン

塵取りも箒も落花まみれかな

燭ゆれて寝釈迦身じろぐかと見たり

日永ビル窓にテナント募集中

波止の灯の等間隔に朧かな

青春の三行詩あり啄木忌

山笑ふ大吊り橋の揺れに揺れ

灯ともりてより雛の間の艶めきぬ

あたたかや出土の壺の並べられ

障子穴かと思紛ひし春の蠅

涅槃変魑魅魍魎も紛るべし

セコイアの銚を立てたる芽吹きかな

屋形船眺めの茶屋や桜餅

山桜天狗颯に吹雪きけり

九輪へと高舞ふ落花仰ぎけり

雨垂れの序破急に春惜しみけり

異人館通りの落花昼かな

踏青子ヒマラヤ杉を仰ぎけり

錐揉むと否との遅速落花舞ふ

巢立鳥マリアの像の辺にあそぶ

律川の調べや花の遊歩道

春空に開業祝ふ気球群

春風が滲みると涙かくしけり

四旬節投句を休む訳にゆかず

垂れ紐と見紛ふ蔓の芽吹きけり

四阿は落書だらけ春愁ふ

磊々に逸る飛沫や雪解川

踏青や師の影ふみてはばかり

吾を呼びし声に振り向く朧かな

日の翳り黄泉も斯くやと黄沙降る

乱帙に春の愁ひのありにけり

落暉燃ゆ浦曲の春を惜しめとぞ

騒ぎてはやむ竹秋の風気俛

松籟に高舞ふ須磨の落花かな

纏れつつ錐揉む落花二三片

街遅日プラネタリウム館を出て

春陰の焼却炉いま火の坩堝

雛屏風連理の鶴を描きけり

凭れあふ羅漢に永き日なりけり

垣直すどころではなし余震なほ

汐遠く引きたる砂嘴に春惜しむ

身じろがず祈りのさまの地虫かな

このところ余震も間遠地虫出づ

夕蛙田ごとのエール交はしそむ

岩田帯授かるによき梅日和

春憂しと妻のわたしに言はれても

偕老の二人と見たり花堤

一陣の柳絮高舞ふ池塘かな

メーデーの空へ向けたるスピーカー

# 夏の句





朴咲くと青天井を指さしぬ

大玻璃に一太刀くれし雷火かな

ロープウェイ指呼の奈落に一瀑布

バス涼しスカイラインをまつしぐら

鳩時計月下美人に鳴きにけり

バラ剪りしときの手傷と覚えけり

子燕の嘴は喇叭のごとひらく

雷鳴に度肝抜かるる厠かな

ブランデーグラスはレンズ水中花

ひた走るドミノ倒しの音涼し

牡丹百雨氣におびたる憂ひかな

読みすすむ聖書日課や薔薇の雨

と見る間に蜥蜴瓦礫に紛れけり

水輪蹴る推進力や水馬

鎌振れば蟪蛄指揮者めきにけり

わが妻は被爆二世やヒロシマ忌

移り氣の虻落ち着かず花ポピー

戻ると見るや斑猫居ずなんぬ

噴水の乱れて鳩を翔たせけり

立ち仰ぐ嶮磴百段青あらし

夕づつと紛ふ高嶺の灯涼し

端居して一と雨ほしき夕べかな

フェリーの灯はや外海となり涼し

じだらくに寝ても効なし熱帯夜

機窓涼し百万ドルの灯を翼下

蟻の列右往左往や山雨急

子子の動きはエアロビクスかな

汐騒にまどろみゐたり籐寝椅子

墓の声夕闇池を包みけり

地団駄や蠅一匹に捌られて

ケビン出て灘の西日をまともにす

水ゆれて読めぬネオンや船料理

ペンギンの表敬並び涼しさよ

手花火のこれからといふ玉落つる

雁行に似たる歩板や花菖蒲

刻の鐘鳴らす水車よ森涼し

雲怒涛なして梅天寧からず

風意地悪噴水我を洗礼す

雷火一閃篠突く雨となりにけり

一掬の風鷺草の動きけり

屹立す島のホテルや明易し

滝道の碑三十六歌仙

不即不離心得てをり道をしへ

よく鳴りて風鈴の舌躍如たり

みちをしへ日の斑の径に紛れけり

灼けし碑に島の殉教史を記す

へなへなと消ゆ炎天の飛行雲

矢印は右斑猫は左へと

銚杉をのぼりつめたる山の蝶

濃あぢさるゲートロードの右左

彩雲の帯の褪めたる夜涼かな

一刷の風に凹みぬ真葛原

遣り水の玉とぞまろぶ苔涼し

キャンプの火煽るは魑魅か魍魎か

一穢なき蒼天滝を落としけり

足弱の杖となりもし避暑散歩

登山バス凸凹道に尻振りぬ

滝の巖一刀彫りのひび走る

嶮競ふ水平線の雲の峰

銀婚の妻へ感謝の薔薇贈る

百丈の巖も裂けよと滝激つ

あめんぼの衝突大事なかりけり

緑陰の棋士は王手をさしにけり

蝶涼しグリーンシャワーの樹間縫ふ

黙禱の一分間や蟬時雨

百合清楚ソロモンの雅歌思ひけり

杉の秀の雫と落つる蛍あり

不意打ちの波舟虫を攫ひけり

早鐘を打つは蜥蜴の喉袋

松籟かはた潮騒か磯料理

大樹海涼しき月を上げにけり

曝しつつ初心に返る一書あり

震災に拾ひしいのち更衣

右左樹齡を競ふ夏木立

白靴の健脚ぶりや男坂

下闇や顔に触れしは何の蔓

一門の墓所なる茂りかな

口論は形勢不利や扇閉づ

街の灯の涼し原爆碑の丘に

蓮の池立錐の余地なかりけり



大胆に高足を組むサンダラス

身じろぐと見るや一擲蟻地獄

千万の影狂ほしき誘蛾灯

山門の一步に仰ぐ青嶺かな

薔薇薫る黄色の屯緋の屯

パジャマ着て月下美人の開く待つ

フェニックス涼し翼下に遊子われ

落つる日にシルエットなるヨットかな

西日中しかめつ面の羅漢かな

観覧車いま天辺や雲の峰

一湾の夕焼に染まるロビーかな

妻の愚痴馬耳東風よビール干す

漁り火の星と散らばる夜涼かな

動揺を隠せぬ扇使ひかな

灰皿と見しは貝がら卓涼し

渾身の反身筍掘りにけり

異な草と抜きて吾妹に叱らるる

星涼し洋上三百六十度

帆を揚ぐる二の腕太き日焼けかな

池の鯉涼しく向きを変へにけり

# 秋の句



鈴虫の輪唱にペン休めけり

雑魚寝なる二等船室秋の蠅

温泉を引けるパイプなるべし草紅葉

キヤデーどちボールに非ず栗拾ふ

大濤に吞まるる釣瓶落しの日

秋思あり汝が洩らしたる一と言に

エレベーター釣瓶落しの日にのぼる

栗を焼くおばさんに聞く寺縁起

秋晴の航跡内海二夕分けす

右手の嶮左手の嶮や紅葉狩

醜草も名のある草も露しとど

碧落に雲のあそべる花野かな

自づからシテとワキあり法師蟬

神杉の全長仰ぐ天高し

窓閉めてノアも斯くやと台風裡

妻と吾の灯下親しむ趣味は別

神慮いますく装ひし花野かな

補聴器の人と佇む秋思かな

しまひ湯に肩の沈めば虫浄土

大玻璃を泪走りす秋の雨

白露のごとく灯ともる過疎の村

寝ころべば地球が回る翳雲

山頂の一本杉に霧迅し

大秋晴水平線の撓みけり

流木をベンチとしたる秋思かな

柚帰る夕かなかなの輪唱裡

長嘆す沖の汽笛の露けしや

鉾杉の鎬を削る天高し

軋みあふ木場の筏や初嵐

磐石の下より縷々と残る虫

湖昏るる遠かなかなの輪唱裡

シスターのベールに触れて銀杏散る

老骨といはるる馬の肥えにけり

釘打たれたる檄文や木の実降る

海の日日落つるに秋思うべなひぬ

秋深し持病可もなく不可もなく

岩頭へ攀ぢる一縷の蔦紅葉

稲架昏れて山の端出づる一つ星

天嶮の城址に虫の名残かな

法話身に入むや耶蘇とは言ひ出せず



パラボラを過ぎゆく秋の雲迅し

霧閉ざす山のホテルのロビー混む

廃屋の屋根と見らるる葛かづら

山頂へ近づくほどに天高し

虫の秋余震の夜々を語り草

葛の蔓落石防止網攀ぢる

夜行バス窓に星飛びはじめけり

間遠なる奈落の瀬音夕紅葉

蒼天へ尖る山容杉の秋

背高のコスモス馬柵に凭れけり

橋半ば運河の秋を聞きにけり

尼の庵二夕筋三筋柿吊す

ライバルと競ひし人の露の墓

小田の藁塚しよぼしよぼ雨に傾ぎけり

かなかなの四方に舂すバーベキュー

このあたり古墳銀座や穂絮とぶ

稲掛くる吾に目つぶしの落暉かな

秋燕サイロの空に群れにけり

羅漢みな誰彼に似て秋を聞く

高きより簷牙に撥ねる木の実あり

木の実独楽いまはのきはの震へかな

古城址の秋を聞けとぞ鳶の笛

歌膝となりて木の実を拾ひけり

堵列せる羅漢につるべ落しの日

手庇に遠嶺の秋を惜しみけり

鏡とすその為人墓洗ふ

月の友一期一会を語り草

添削の一字うべなふ夜学かな

売地札傾ぎしままや露葎

吊橋の一投足に秋の声

翼折る芭蕉は風にはばたかず

クラークの右手指す天の高きかな

人生はこれより佳境菊に立つ

八つ裂きの芭蕉になほも雨の鞭

菊の虻懸崖のぼりつめんとす

萩の屑流す山雨となりけり

ななかまどバスに触れもす信濃かな

馬柵つづくかぎり歩みて秋思かな

野生馬の肥えて噴煙高きかな

俳風を異にして佇つ秋風裡

書淫の眼閉づ鈴虫の輪唱裡

すて猫の声のか細く秋風裡

露万朶朝日の躍り出たりけり

ジョギングの土堤何処までも翳雲

画架立てて絵を描くでなし秋の人

脱稿の深き疲れや虫すだく

岩鼻を踏んまへて立つ秋の人

秋日落つ議事遅々としてはかどらず

雲の翳とどまり難し秋の峰

暮れなづむ野に湧くごとく赤とんぼ

法の山大合唱の法師蟬

乱帙を砦としたる夜学かな

秋水を三段跳の石礫

託されし一語を誓ふ展墓かな

空腹の我に連発威し銃

干されたる魚網に縋る秋の蠅

稲掛けを終へて老骨棒となる

この杜の神さぶ秋を聞きにけり

末枯の野良猫われに媚びにけり

ひぐらしや奈落となりし札所道

# 冬の句





猫の目のごとくに冬日ひろがりぬ

雲切れて電光石火冬日射す

五指固く組みて祈れば悴まず

三日月のひつかかりたる枯木かな

道化師の長き睫に風花す

地団駄の靴がくづせし霜柱

主婦業に定年はなし冬支度

照れば躁戻れば鬱白障子

猫舌にのせし湯豆腐七転す

切岸に仙人髭の氷柱かな

発破音罨がへしに山眠る

枯野あり塚は要をなせりけり

人垣を爪立ちのぞく年の市

十字架の血潮説かるる息白し

訥弁の彼が焚火の火守役

大空をうかがふ鋭目ぞ檻の鷲

雪吊の一本松の男ぶり

汝は画帳吾は句帳や日向ぼこ

おでん酒企業戦士の彼悼む

炉話は創造論はた進化論

この家の臍といふべき大炉かな

鴨突進恋の纏れと見たりけり

金輪際寒の釣師ら不言

水の上をたたら走りし鴨翔ちぬ

さきほどの雪うそのごとく星明り

雪吊の縄の緊張感を見よ

軒氷柱ダイヤモンドの雫落つ

四阿に手炉置かれある御苑かな

死後の世を論じて日向ぼこりかな

翁忌の句会女流が圧倒す

まつすぐに帰る気はなし日脚伸ぶ

碧落に孤高の鳶や冬晴るる

亀甲にひび割れて沼涸れなんと

枯山を登るは雲の影法師

存問の声をかけあふ息白し

魚を糶る呪文のごとく白き息

ジョギングの父子の白き息揃ふ

わたししか読めぬ句帳の悴む字

白息の一と声に競り落しけり

磐石に喝と一文字竜の玉

白息に誦す鎮魂の一碑あり

工事場の朝の始まる焚火かな

演説士握り拳をあてて咳く

念力の箍緩みたる嚏かな

人波に鳴りしラッパは社会鍋

土不踏さすりて老の日向ぼこ

逆縁の恨み辛みを炉に語る

玻璃窓をノックしてをる冬芽かな

出庫する電車に霜の線路かな

刻打つや否やの退社日短

ひろげみる嵯峨野の絵図に時雨けり

咳が咳よぶ通勤の電車かな

寒紅の婦警鋭き目のくぼり

砲列のカメラに潜く鴨遠し

改札は店のおばさん枯野駅

鳩をかし一つ潜けばわれもわれも

風花の乱心見よや山襖

息白く杜氏は昔を語りけり

室咲と窓際族に射す日かな

墳寒し磊磊山と積みしのみ

抽んでて韋駄天走るラガーかな

冬菜畑震禍の更地らしきかな

心無きナイフ傷見る冬木かな

枯葦の揺るるは鴨の恋路かな

岬鼻のガードレールに大根干す

子供らはテレビの虜炉に寄らず

炉の埃天井遊泳して落ちず

息を継ぐ間もあらばこそ鳩潜く

土に帰す花ひひらぎのこぼれかな

山を守る苦労話や葉喰

末の娘とペアルックなるセータかな

舌頭に千転せむと懐手

荒磯波騒ぐ北窓塞ぎけり

水鏡して紛らはし枯蓮

空谷の奈落へ朴の落葉かな

もの見して枯木の烏啼きにけり

羽づくろひ余念なき鳩神迎え

冬日しりぞきしベンチに我孤独

小競り合ひしてをる鳩や神の留守

銃眼の四角三角冬日さす



師を悼み今宵の聖樹灯ともさず

膝撫せて満を待す手や歌がるた

時計台聖夜の針を重ねけり

初便り一筆箋に二三行

金屏に百寿ことほぐ墨書かな

恵方へと傾く須磨の磯馴松

瑞雲を魁として初茜

火花とぶ視線と視線うたがるた

須磨の句碑初松籟を聞かんとす

双六の出世街道まつしぐら

蒼天に雲一刷けの淑気かな

途中下車して残り福いただきぬ

食積に躊躇してをる箸のさき

福笹を提げて立喰そぼすする

七種や長命の師を語り草

巫女二人比翼の舞や初神楽

吉兆の鯛福耳に触れにけり

パチンコ屋不況知らずよ初戎

きのふにも優る人手や残り福

スケジュール目白押しなり春隣

## あとがき

『俳句は考えて作るものではなく、感動と言うプロセスを経て授かるもの』

阿波野青畝、小路紫峽両先生から教えて頂いたこの理念を信じて写生の修練に励んできた。

今風の俳句は、新しさを重視するあまり、やもすれば主観がもろに表にでた独りよがりの作品に陥りやすい。

受け継がれてきた伝統俳句のこころを大切にしながら新鮮な作品を追求していくこと、そして恩師から託されたこの志を、後なる人たちに正しく伝えていくことが私自身に課せられた使命だと思う。

この句集は、ホームページ『ゴスペル俳句』で学ばれる初心者の方の一助になればと祈ってまとめたものです。つたない作品を編纂するにあたり、いろいろ労して下さった、さつきさんに心から感謝します。

二〇一三年一月二三日

やまだみのる

四季別 やまだみのる俳句集

平成二五年二月四日 印刷

平成二五年二月四日 発行

著者 やまだみのる

印刷・製本 株式会社ミドリ印刷

ゴスペル俳句の世界

////////////////////////////////////  
<http://www.gospel-haiku.com/>